

聖書箇所：ルカの福音書7章1～10節

説教題：ただ、ことばによって

1 ユダヤ人とローマ兵

二千年前のイスラエルにはローマ帝国の軍隊が駐留しています。ここに登場する百人隊長とは、その名前の通りにおよそ百人前後の規模の軍隊を指揮する隊長のことです。

自分の国であるのに他の国の軍隊が土足で入り込み、人々を監視し、税金を取り立てるのですから、ユダヤ人に歓迎されるはずはありません。また律法学者、パリサイ人から見れば、ローマ軍は異邦人の集まりなのです。ユダヤ人の神を信じない者は自分たちの仲間ではない。そのように考えていましたから、いつまでも互いにうちとけるようなことはありません。お互いに敵同士。これがユダヤ人とローマ兵との基本的な関係でした。

ですから、ここに書かれているようにユダヤ人の長老たちが百人隊長のことを高く評価するようなことはきわめて珍しいことでした。イエスは、長老たちからことの事情を聞いて、すぐに百人隊長のところに向かいます。今日は、この百人隊長の心の中にどんな変化が起きていったのか、そのところに目を留めていきます。

2 百人隊長の変化

(1) 資格があります

ことの発端は、百人隊長の下で働いているひとりの兵士が病気で死にかけているというところから始まります。百人隊長は、いろいろな手段を尽くしたでしょう。軍隊付きの医者に診せ、治療を試みたはずですが、けれど

もよくなるどころか、いまや危篤状態です。普通ならどうでしょう。たとえ部下が死ぬことになり、そのことで上司から説明を求められても、百人隊長には落ち度はありません。やるべきことはやりました。言い訳がきちんとしてできます。しかし、この隊長はそれではあきらめきれません。単なる部下のひとりではないのです。大切な自分の子供のように思っていたからでした。

そこで彼は最後の望みとして、気心の知れたユダヤ人の長老たちをイエスの所に派遣する決心をします。長老たちの証言から、長老たちがローマの百人隊長に対して大きな信頼を寄せていることがわかります。日頃から地域の人たちと親しい交わりを持ち、何か困ったことがあると、相談に乗り、実際に力を貸してやる、そんなふうにして培われてきた信頼関係がそこにあります。

非常に謙遜な百人隊長に見えます。あとでイエスが言うように、この人はりっぱな信仰者だったのだと思いたくなります。しかしちょっと待ってください。百人隊長は最初からすばらしい信仰者であったのか。確かに謙遜に見えるけれども、そうとは言い切れない部分があるのです。

鍵となることばは「資格がある」、「資格がない」です。

もう一度よく長老たちの証言を見てみましょう。4節。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」

長老たちのことばではあるけれど、百人隊長も同じ考えのはずです。自分には資格があると考えたので、わざわざイエスの所に使いを出したのです。この後どうなったか。次の場面を見てみましょう。

(2) 資格は、私にはありません

イエスが隊長の家の近くまで来たとき、百人隊長はこんどは友人を使いに出し、こう伝えております。「主よ。わざわざおいでくださいませんように。あたを私の屋根の下に入れする資格は、私にはありません。」

最初は「資格がある」と長老たちに言わせていたのに、こんどは「資格がありません」と言い直しています。なぜでしょう。百人隊長が非常に謙遜なのでこう言っているのでしょうか。であれば最初からそう言えばいいはずではないですか。なぜ、後になってから訂正をするのでしょうか。なにかの変化が起きています。

隊長が「あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません」と言わなければならなかった実際的な理由は、確かにあったのです。先ほども述べたように、ローマ兵は異邦人扱いされていました。ユダヤ人は律法学者から、異邦人の家に入ってはならない。異邦人と食事を共にしてもならないと教えられていました。もしここでイエスを家の中に入れたなら、イエスは罪人の家に入ることになるのですから、そのことでイエスが非難されることになります。自分のことばで、イエスに迷惑をかけてしまう。そのことを考えて、百人隊長はわざわざ友人を使わし、家に入らないでくださいと伝言を託しました。

それを聞いて、「やっぱり百人隊長は謙遜で、りっぱな信仰だ」と、思うでしょうか。

だったら、なぜ最初から言わなかったのでしょうか。長老たちには「助けに来てください」と言わせておいて、いざ実際にイエスが家の近くまで来ると、今度は「入らないでください」と言うのです。それだけではありません。もう一つ不思議なことがあります。

(3) ただ、おことばをいただかせてください

百人隊長は友人たちの口をとおして次のように語っています。7節途中から。「ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。」

なぜそんなことをお願いするか、その理由も説明もしています。軍隊では兵隊はことばで動く。「行け」と言えば行くし、「来い」と言えば来る。自分の部下は全部ことばで命じられたとおりに行動する。それと同じように、イエスがことばを語ってくだされば、必ずそのようになる。だからおことばをください、と言いました。

さて、どうでしょうか。この説明が理解できまじょうか。確かに会社のような組織に属している者は、上司のことばで動きます。来週からどこそこの営業所に勤務せよと言われれば、どんなに遠いところであっても、行かなければなりません。だから百人隊長の言っている事の半分は事実として理解できます。

わからないのはその後です。人がことばで動くことと、人がことばでいやされること、この二つは全然違う話ではないか。もし、人がことばでいやされるといふのなら、私たちは何度でも言います。「あなたの病気は必ず治ります。」もしそれで済むのなら医者はいりません。兵隊はことばで動くかもしれない

けれど、病気はことばで治るようなものではない。この二つはまったく別のこと。百人隊長の言い分はずいぶん無理があるように思えます。

それからもう一つ疑問があります。こう思っていたのなら、なぜ最初から「おことばをいただきさせてください」と言わなかったのでしょうか。長老たちがイエスの所に行った時点で言えばよかったのではないですか。どうして、家のそばに来たときになってから言うのでしょうか。

百人隊長になにかが起きていると考えなければ説明が付きません。イエスはただ長老たちの話を聞き、ただ百人隊長の所に向かっているだけに見えます。最初は「来い」と言われ、来てみると今度は「入るな」と言われ、ただ人々に振り回されているだけにも見えます。そうではありません。イエスは積極的に百人隊長のところに語りかけ続けて、なにかの気づきを与えようとされています。

3 あなたの敵を愛しなさい

(1) 百人隊長

いったいどういうことなのか。百人隊長がどんな人であったのか。もう一度整理してみましょう。この人は、ローマ帝国の権威を振り回すようなことをはしません。ユダヤ人に対し親切を施し、長老たちからも深く信頼されています。言ってみれば、百人隊長は敵を愛するということを実践してきたのです。しもべが病気になり死にかけたとき、自分の敵であるユダヤ人イエスという男に治療を頼もうとも思いました。敵を愛していなければできないことでした。

でも、長老たちを送った時点では、彼は思っていたのです。イエスのほうから自分の

家に来てもらう。そういう資格が自分にはある。そしてもう一つ思っていました。病気のしもべがいやされるためには、イエスがしもべのからだに触れる必要がある。病人のところに来て初めて治療ができる。そう思い込んでいました。だから、「しもべを助けに来てください」と言ったのです。

でもじょじょに、そうではなかったということがわかってきました。最初自分には資格があると思っていました。しかしイエスが間近に来られたとき、気がつきました。自分には資格がない。あの聖い方に対し、自分の家に来いと命じるとは、なんて無礼なことをしてしまったのかを恥じ入りました。自分がどれだけ汚れた者であったのか、罪の意識が迫ってきました。

罪ある者の家に聖い方を迎えることはできません。でも、死にかけているしもべを直してもらいたい。その思いは変わりません。どうしたらいいのか、そのはざまでも苦しみます。

百人隊長が最後にたどり着いた結論がこうでした。「ただ、おことばをいただきさせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。」

イエスを家に迎え、手を触れてもらうことがかなわなくなれば、せめておことばでも、とわらをもすがら思いで、百人隊長は自分が語ることでできる精一杯の願いをイエスに申し上げたのでした。

(2) イエス・キリスト

イエスは6章27節でこのように語っていました。「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。」

このみことばになぞらえれば、百人隊長は

十分に敵を愛していたつもりだったのです。だから自分には資格があるとさえ思っていました。しかし、イエス・キリストが自分の家に向かってこられるうちに、彼は知らされます。「自分にはイエス・キリストを迎える資格がない。この方に直接お目にかかることさえできない。自分は本当に貧しい者だ。敵を愛していたつもりだったけれど、実は自分にはそんな愛などなかった。」

イエスの命令に従うことができない自分であることに気がつきました。

でも、イエスは言われました。9 節。「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことはありません。」

敵を愛したからりっぱな信仰だと言っているわけではありません。自分には愛などない、あるのは汚れた罪だけだと告白する者にこそ、本当の信仰があると言ってくださっているのです。

聖い方に直接会うことができない。せめてことばだけでもいただけませんか、小さなことを願う者、そのような者にこそ大きな恵みが注がれていくのだと言われました。

イエスは、人々に振り回されていたのではありません。百人隊長の家に向かって歩きながら、この隊長の心に確かな信仰が芽生えていくようにと働き続けてくださっていたのです。

主の恵みが注がれるとはこのようなことなのです。主の御名をあがめたいと覚えたいと願います。